

モレルの追悼記事

林 田 治 男[†]

初代鉄道技師長モレル (Edmund Morel) は、1870年2月2日南豪州アデレードを出発し、2月21日セイロン (現スリランカ) の港町ゴールでレイ¹⁾ と会談し、3月26日上海でレイの代理人トロートマン²⁾ と雇用契約を締結し、4月9日 (明治三年三月九日) に彼と一緒に横濱に到着した。モレルは、来日直後から鉄道建設に邁進し、同時に新生日本に政府主導によるインフラ整備、技師養成の高等教育機関の創設などを建議した。維新政府は彼の提案を採用し、工部省や工部大學校をつくっていった。モレルが高く評価されているのは技師長としての功績のみならず、的を射た建議により近代化を指南したことにもよる。

しかしモレルは健康を蝕まれ、72年10月14日 (五年九月十二日) の開業式栄典に浴することなく71年11月5日 (四年九月廿三日)、横濱で齢30にして亡くなった。在日期間は

[†]大阪産業大学 経済学部 経済学科 名誉教授

草稿提出日 11月14日

最終原稿提出日 11月14日

1) Horatio Nelson Lay, 1832~98年。香港行政官の通訳を皮切りに領事を経験した後、初代總稅務司 (Inspector General) に就任したが、63年退任した。

69年7月に来日し、鉄道開設を勧めその資金提供を申し出た。12月に日本政府と一連の契約を締結し、鉄道敷設、資材調達、外国人雇用など大幅な権限を委任された。結局、70年6月日本政府が契約を破棄し、12月に示談が成立し、レイとの関係はすべて解消された。

2) Johan Friedrich Heinrich Trautmann, 没年不詳。彼の英国への帰化申請書【HO1/116/4463】に拠れば (HO は、Home Office 略号)、24年4月22日ハンブルグで生まれ、59年10月に英国に移住し、ロンドンで事業を行っていた。64年7月12日、英国への帰化を申請し、許可された。67年8月27日から数回にわたり、上海での事業に伴い長く英国を留守にするのでパスポートの有効期間を延長したいという申請文書も同封されている。英国の下院文書には、上海在留の英国人で船舶を所有している人物の名前が挙がっているが、トロートマンもその中に含まれている。国勢調査個票に拠れば、彼の英国生まれの妻や家族は、モレルの実家に程近いブロード・ストリートに住んでいた。

70年2月、レイから日本における代理人に指名された。モレルと同行して横濱に到着したが、日本政府から徹底的に忌避され面会すらできず、やむなく5月17日横濱を立ち上海に帰った。その後、レイから代理人を解任された。

トロートマンとモレルの関係は、田中時彦『明治維新の政局と鉄道建設』204~206頁を参照してほしい。またモレルの動向は林田『エドモンド・モレル』第4章に詳しい。

19ヶ月弱と短かった。看病を尽くしていたハリエット夫人³⁾も翌日に息を引き取り、夫婦の葬儀は11月7日に行われた。この悲劇が感情移入をもたらし、事実が蔑ろにされ、モレル像が歪められてきた面もある。

モレルの経歴を調べる際に、出発点となるのは、夫妻の死亡を伝え「追悼記事」を載せている72年11月11日(土) *The Japan Weekly Mail* (JWMと略す、横濱で発行)、および *The Minutes of the Proceedings of the Institution of Civil Engineers* (英国土木学会誌、PICEと略す)、vol. 36, 1873, *Memoirs*, pp.299~300の二つである。本稿では初めに、モレルの経歴がどのように紹介されていたのかをまとめるが、説明の都合上PICEを先に取り上げる。また神戸で発行されていた *The Hiogo News* (『ヒオゴ』と略す) 11月8日、『横濱毎日新聞』明治四年九月廿四日(11月6日)も取り上げる。その上で、JWMとPICEの「追悼記事」執筆者を推理する。

PICE「追悼記事」といえども必ずしも正確とは言えず、一次史料や記録に立ち戻って確認したほうがよい、とこのモレルの経歴紹介は例示している。鵜呑みとすり替えは禁物である。

なお筆者は「モレルの経歴に関する諸説」(『大阪産業大学経済論集』第11巻1号)の「1. 亡くなった頃の資料」で、「追悼記事」を紹介し執筆者を推理しているが、本稿ではその後の調査により拡充と補強を試みている。

1. PICE 第36巻「追悼記事」

当然のことながらPICEの追悼記事は、高名な技師、重要人物ほど多くの頁を割いている。モレルは会員(Member, 年齢資格は33歳以上)ではなく準会員(Associate Member, 年齢資格は25歳以上)だったが、「追悼記事」に1頁半と長めの分量が充てられている。そこで紹介されている内容を確認しておこう。

1-1. 経歴紹介

モレルは、ピカデリーおよびノッティングヒルに在住していた故トーマス・モレルの一人息子で、1841年11月17日に生まれた。

キングス・カレッジ・ロンドン(KCLと略す)で教育を受け、その後ドイツやパリの技術学校で学んだ。続いてロイヤル・エンジニアの委託を受け、ウリッチの軍事技師養成

3) Harriet, 旧姓 Wynder。生年・生地不詳。

学校で学んだが、近視で資格を取れなかった。

58年5月から土木学会会員のクラーク（Edwin Clark, 1814～94年）に3年半師事した。英国を離れ、62年からニュージーランド（NZと略す）政府に勤め、道路技師の首席補佐、63年はウェリントン地区の主任技師に従事した。64年65年は主に豪州で自営していた。その後1年半ラブアンで提案された鉄道を検討した。67年鉄道を建設し縦坑を掘削するため、ラブアン石炭会社の主任技師兼マネージャーになった。69年健康を害し、南豪州に移動し、鉄道建設促進のための豪州のインダストリアル元利保証制度導入協会の顧問技師になった。

しかし、日本で鉄道建設の技師長に就任するため、それを辞し来日した。日本政府から特別の権限を付与されていたレイと、ゴールで締結した契約期間は5年であった。70年4月9日に来日し、延長20マイルの東京横濱間の鉄道建設に取り掛かると同時に、同じく20マイルの神戸大阪間も始めた。

次第に健康を損ね、体質的な肺の虚弱さが急速に悪化し、鉄道の完成を見ることなく71年11月5日に死亡した。妻も、その12時間後に亡くなった。11月7日に、夫妻の葬儀が横濱で行われ、埋葬された。日本政府は、功績を高く評価していた。病気のことが、天皇陛下の耳にはいったが、彼はその1週間後に亡くなった。陛下から工部大輔伊藤博文を通じ、悔み状を添え金1,000ポンドが下賜され、葬儀費用も日本政府が負担した。

彼は65年5月23日、土木学会の「準会員」に選ばれた。

1-2. 内容の検討

この追悼記事は、「1841年誕生」が間違っているが、その他若干の不正確さはあるものの内容面でそれほど問題はない。

初めに「追悼記事」冒頭の文章を採録しよう。

- MR. EDMUND MOREL, the only son of the late Mr. Thomas Morel, of Piccadilly and Notting Hill, was born on the 17th of November, 1841.

これを根拠に、モレルはピカデリー・ノッティングヒルで生まれたと紹介されることがあるが、単に父親の住居を説明しているに過ぎず、それは誤解である。ピカデリーは、父トーマスや叔父たち⁴⁾が営んでいたワイン商のある目抜き通りである。ノッティングヒルは19世紀中葉のロンドン西北郊の新興住宅地で、一家は50年に父親の再婚早々に引っ越し

4) モレル家の事業に従事していたのは Thomas Annet Lewis (モレルの父, 1808～60年), Henry (1814～62年) と Edmund Stephen (1820～76年) である。他に二人の叔父がいた。

している⁵⁾。一人の人間が異なった二つの場所で生まれることは、ありえない。なお、モレルは一人息子ではあるが、姉エミリー (Emily, 1838~1929年) と妹アグネス (Agnes, 1842~98年) がいた。

モレルの「出生証明書」には1840年11月17日生まれと明記されており、「死亡証明書」の年齢、および後年彼が学んだキングス・カレッジ・スクール (KCSと略す) や KCL 工学部 (直訳すると応用科学部となるが、カリキュラム内容から工学部と訳したほうが相応しい) の「入学身上書」や「入学金・授業料納付書」の年齢欄も1840年誕生を支持している。その次の文章の初めの部分のみを引用する。

● He was educated at King's College, London,…….

彼が KCL で教育を受けたと紹介しているだけである。在学期間、出席・成績状況については一切言及がなく、しばしば述べられる「成績優秀説」や「卒業説」はここにはない。

続けて、技師として働いた場所について述べている。メルボルン、オタゴ (NZ 南島)、ウェリントン、ラブアン、南豪州の順である。年号がやや不正確だが、おおむね間違いはない。モレルがメルボルンや NZ で、鉄道建設に従事していたとは記していない。

明確に鉄道に携わったと述べているのは、ラブアンだけである。南豪州ではインド的元利保証云々と述べ、間接的に鉄道建設を目指していたと表現している。事実、モレルは南豪州で鉄道建設予定路線を測量していた。

後年日本でモレルの経歴紹介で唱えられてきた説がいくつかあるが、それらが PICE に依拠していないものを列記しておこう。★は筆者のコメントである⁶⁾。

- ① ピカデリー・ノッティングヒル誕生説。 ★ PICE に拠るとすれば、それは誤読である。父親たちがピカデリー210・211番地でワイン商を営み、そこに隣接するイーグル・プレイス1番地で生まれた。ノッティングヒルは家族の50年代の住所である。
- ② KCL 卒業説。 ★学んだのであり、卒業と飾りたててはいない。
- ③ 豪州ラブアン説。 ★ラブアンの場所を確認すれば、北ボルネオであることは直にわかる。
- ④ NZ 説。 ★ NZ の鉄道建設に従事し、その完工後来日したという説だが、一切そのように紹介してはいないし、またこの説は誤りである。

5) 父が50年5月16日、クリスティアーナ (Christiana Lodder 旧姓 Budd, 1808~77年) と再婚したときの住所はピカデリーとなっているが、51年3月30日の国勢調査時点で一家はノッティングヒルに住んでいる。

6) モレルの経歴と貢献については林田『エドモンド・モレル』を参照してほしい。

- ⑤ セイロン説。 ★セイロンの鉄道建設に従事し完工後来日した、という紹介は PICE になく誤りでもある。ゴールでレイとの契約を締結した、とは記している。
- ⑥ 土木学会会員説。 ★この PICE では、「準会員」と明記している。
- つまり、これら①～⑥の説は PICE 「追悼記事」を厳密に読まず、誰かがどこかの時点で拵えてしまったものである。PICE に依拠したがゆえに誤っているのは「1841年誕生説」である。

2. 新聞の死亡記事，経歴紹介

日本国内で発行されていた新聞が、モレルが亡くなった経緯をどのように伝え、経歴をどう紹介していたかをみよう。

2-1. 11月11日 JWM

1871年11月11日、JWM は紙面冒頭の「死亡記事」で、モレルが11月5日（日）午後30歳で、ハリエット夫人がその12時間後に25歳で急死したことを伝えている。続いて第1面「葬儀記事」に、7日（火）の参列者氏名が記されているのは次の通りである。〔 〕内は筆者が推理説明したものである。

Capt. Bridgeford [横濱駐留英国軍工兵大尉ブリッジフォード Sidney Thomas Bridgeford]

Mr. Yamai [工學頭山尾庸三]

Mr. Adams [英国公使館員アダムズ Francis Ottiwell Adams]

Mr. Sheppard [英国人技師シェパード Charles Shepherd, ?～1875年]

Mr. Takida [鐵道助竹田春風]

Mr. Howell [JWM 編集者ハウエル William Gunston Howell]

以上モレルの柩に侍っていた。

Dr. Hadlow [英国海軍病院外科部長ハドロウ Henry Hadlow]

Major Barton [横濱駐留英国軍大佐バートン Cuthbert Ward Burton]

Dr. Coldwell [横濱駐留英国軍外科医コールドウェル John Caldwell]

Mr. Shand [英国人技師シャンド Theodore Shann, 1850～78年]

Col. Richards [横濱駐留英国軍司令官リチャーズ Fleetwood John Richards]

Mr. Hare [英国人技師ヘア Herbert Thomas Hare, 1847～74年]

Mr. Pitman [ピットマン John Pitman, 生没年不詳]

以上ハリエット夫人の柩に侍っていた。

Mr. Enoye〔鐵道頭井上勝〕

Mr. Cargill〔鐵道差配役カーギル William Walter Cargill, 1813~94年〕⁷⁾

記事に氏名が記されている人物を簡単に紹介しておこう。ここから、モレル夫妻の交友関係を窺うことができる。

ブリッジフォード大尉は、1836年2月17日ロンドンのソーホー生まれ（父 Thomas は肖像画家、母は Mary Jane）、97年12月30日ジャージー島没。彼は燈臺寮技師ブランドンの提案、鐵道技師ボイル、シャーヴィントン、デイ、イングランド、クリスティ、および燈臺寮マクリッチー（James MacRitchie）の推薦を得て77年2月に準会員として土木学会に入会している。遺産額は11,799ポンド9シリング4ペンス。

公使館員アダムズは、1826年10月10日、カナダのケベックで生まれた。英国の名門ラグビー校を経て、43年11月20日ケムブリッジ大学トリニティ・カレッジに入学し、48年卒業し、51年修士号取得。47年4月14日インナー・テンプルに、50年11月6日リンカーズ・インに入り、52年法曹資格を得ている。外務省に入省し、ストックホルム、ペテルブルグ、パリ、ワシントンで書記官を務め、68年から東京の公使館書記官。その後ベルリン勤務を経て、ベルンで特命全権公使を歴任し、88年引退。79年に叙勲され、89年7月20日滞在先のスイス、グリンデルバルトで死去し、61,121ポンド13シリング5ペンスを遺した。

新聞編集者ハウエルは、1829年1月29日、父トーマス、母メアリー・アンの息子として生まれ、6月30日ロンドンのランベスで洗礼を受けた。59年3月3日ケンジントンでチャールズ・フレデリック・ボールドウィンの娘ヘレン・ソフィアと結婚した。ヘレンは39年10月16日洗礼を受け、93年3月20日ケント州で亡くなった。ハウエルは1909年7月18日グリニッジで亡くなり、遺産は1,113ポンド19シリングだった。『モーニング・ポスト』（ロンドン発行）60年3月31日に拠れば、3月29日上海で娘が生まれたとあり、結婚後中国に来ていたことがわかる。また『在日外国人名鑑』1870~77年版に記載があり、横濱在住時に娘ヴァイオレットが生まれている。

ハドロウ外科部長は、1836年3月9日ロンドン生まれ（父 Henry は外科医、母は Anne）、1927年11月30日ポーツマス没。遺産額は22,283ポンド1シリング9ペンス。

バートン大佐は、1831年6月2日ケント州で洗礼を受け、90年3月20日ケント州没。彼は後、少将になった。遺産額は785ポンド13シリング2ペンス。

コールドウェル医師は1828年10月3日リッチモンド生まれ（父 John、母 Isabella）、87

7) シェパードの紹介は山田直匡『お雇い外国人④ 交通』157~158頁、シャンは同書166~167頁、カーギルは同書170~171頁および林田『日本の鐵道草創期』254~256頁参照。

なお Sheep + herd〔羊の群れ〕から転じて、Shepherd〔羊飼〕となった。

年9月29日ウィンブルドン没。彼は後に病院・艦隊の副監察官を務めた。遺産額は591ポンド9シリング。

リチャーズ司令官は1824年2月24日コーンウォルで洗礼を受け（父 George Spencer は英国海軍司令官、母 Emma Jane）、86年5月8日デヴォン没。彼は後、少将になった。遺産額は786ポンド13シリング。

技師ヘアは、土木学会『加入者名簿』に拠れば、ハーバート・トーマス・ヘアが建築副役として来日従事していた（日本側史料では「ヘアール」）。彼は1847年2月16日ロンドンで生まれ⁸⁾、62年8月まで3年間スコットランドのグレナルモンド校（Trinity College, Glenalmond）に在籍し、63年ミクルマス学期から65年イースター学期まで KCL 工学部で学んだが、卒業していない。全体的に、出席状況は良好で、数学、機械学、化学などの理論系の成績は芳しくないが、地質学、鉱物学、製図、実習などの実学系の成績は良い⁹⁾。KCL で学んだという共通点があり、ヘアはモレル夫妻と親しかった。71年2月11日から5年契約で雇用されていた。ところが辞職願が出され、モレル死去から1年経った72年11月に受理されている¹⁰⁾。離日後、上海の海関で働いていたが、74年6月3日、滞在中の香港のホテルで、心臓をピストルで撃ち自殺した。遺書の有無を含めてその原因については載っていない¹¹⁾。

ピットマンは、『在日外国人名鑑』1870～76年版の横濱在住者の中に彼の記載がある。73年版では、居留地32a 番地ピットマン社、鐵道寮代理人。75年76年版では山手107b 番地、とあるが事務所の記載はない。またピットマンに対し、70年5月2日横濱のランガン社が諸費用雑費として洋銀72ドル75セントを受取った¹²⁾。つまり70年から76年頃まで横濱にいた商人で、モレル到着直後には、すでに鐵道関係の取引をしていた。71年7月22日 JWM の乗船記録に、神戸から東京丸で15日に横濱に到着した中に、モレルの次にピットマンの名前がある。鐵道用資材の取引を行っていたので、これも彼だと思われる。他方ラブアン時代の67年12月21日、ジェームズ・セント・ジョン宛に、ピットマンは炭鉱からモレルと連名で手紙を出している。その肩書きは、海事監督兼総支配人である¹³⁾。

8) ブロンプトンのホーリー・トリニティ教区（Holly Trinity, Brompton）1847年「洗礼届」17頁。

9) KCL 成績簿【Engineering Register No.1, 1857-69】。

10) 『鐵道寮事務簿』第4巻206号。

11) 『ノース・チャイナ・ヘラルド』74年6月13日。ヘアは67年11月、土木学会の「学生会員」になったが、推薦が不要だったのでこれ以上の経歴調査が容易ではない。なお彼の父トーマスは、有名な法律家で政治改革に熱心に取り組み、『オックスフォード人物事典』にも載っている。

12) 『明治前期財政經濟史料集成』第10巻、20～21頁。

13) 英国国立公文書館請求番号【CO144/27】19～21頁、【CO144/24】456頁と【CO144/26】482頁、483頁の手紙にも名前がある。CO は、植民地省 Colonial Office の略号である。

葬儀を主祭したベイリー (Michael Buckworth Bailey) は1827年8月4日インドのコッタヤム生まれ (父 Benjamin, 母 Elizabeth), 99年12月6日エセックス没。遺産額は124ポンド5シリング。彼は61~74年, 横濱の英國聖公会牧師を務め, 日本に西洋野菜を導入した人物としても有名である¹⁴⁾。

なお米国海軍マシューズ (Matthews) は, JWM に姓しかなく Japan Directory にも記載が見当たらない。

彼らの中でアダムズは, 11月15日付けで外相宛にモレルが肺結核で死亡した旨伝え¹⁵⁾, ハウエルは, モレルが10月30日に遺言書を認めた際に立ち会っている。ヘアは, モレルが亡くなった, という電報を横濱から工部省宛に打ち¹⁶⁾, ピットマンは, モレル夫妻の死亡届けを提出している。

JWM「追悼記事」は次のように経歴を紹介している。〔 〕内は筆者のコメントである。

モレルは, フランス人と英国人の間に生まれた〔両親とも元をたどればフランス系だが, 英国生まれ〕。チェルテナム学校の後〔確証なし〕, ドイツやフランスで学んだ。パリを最後に大陸での遊学を切り上げ, 引続きウリッチで学んだ〔しかし KCS に在学したことを全く述べていない〕。有名な技師クラークに3年半師事した後, 英国を離れ, 2年間 NZ 政府の下で, 道路技師の首席補佐を務めた〔半年ほど, メルボルンと NZ ダネディンでクラーク特許のドック建設を推奨していた〕。その後ラブアン会社で, 主任技師として約5年間従事した〔65年12月から2年半~3年半〕。南豪州の鉄道に関する報告を行う予定だったが〔南豪州で建設予定路線の測量を実施〕, 英国への帰途それを辞め日本赴任を受入れた。18ヶ月間の日本滞在中に知己を広げつつ, 精力的に業務を遂行した。

他にレイとの関係, 彼の性格, 仕事振り, 病気のことを詳しく伝えている。

2-2. 11月8日『ヒオゴ』

『ヒオゴ』11月8日記事を紹介しよう。横濱からの情報として, JWM が伝えたこと以外には次のように紹介している。〔 〕内は筆者のコメントである。

モレルは, 豪州から日本へ赴任した。持病の肺結核を患っていたが, 来日後徐々に悪化

14) 酒瀬川純行 “Two Victorian Englishmen Who Introduced Western Vegetables”, 『志學館大学人間関係学部研究紀要』第30巻1号, 38頁以降参照。

15) 英国国立公文書館請求番号【FO46/142】255頁。FOは, Foreign Office の略号である。

モレルが午後1時15分に亡くなった, というカーギルからアダムズ宛11月6日書簡がこの中に入っている。

16) 『鐵道寮事務簿』第1巻, 66号, 319頁。

していった。前の週までは客人と会っていたが¹⁷⁾、急激に悪化し11月1日水曜日以降、危篤状態に陥った。モレル夫人が昼夜、病床の傍らで看病を続けていた。不眠不休の看病による緊張で、彼女自身も12時間後に亡くなった〔夫人の献身ぶり、遠因として疲労と精神的ショックを示唆〕。数日前、冬の間シンガポールで療養する許可が下り〔インドの間違い〕、5,000ドル支給されることが決まったその直後だった。たくさんの人が葬儀に参列すると予想し、彼の死は外国人社会にも日本政府にとっても大きな痛手である、と結んでいる〔彼の人の人柄と功績を間接的に褒めている〕。

「昨日日曜日」とか「葬儀は明日行われる」と述べているので、この記事は11月6日水曜日に書かれている。神戸の新聞記事であることを加味すると、異例の扱いである。

JWM と比べ、片方の親がフランス人であること、ラブアンでの在任期間以外、特に大きな相違点はない。なお『ヒオゴ』には療養予定地以外、誤りはない。

2-3. 九月廿四日『横濱毎日新聞』

モレル夫妻の死を報じた日本語新聞の取り上げ方を確認しておこう。

『横濱毎日新聞』は社名も加えて、1頁4段組で2頁のうち、モレルの死亡に1段(+1行)を充て、後半には鐵道建設の進捗状況を記している。

「英國無双の工部之道尔通明なる者にして、最も萬國中に英名を轟かせし者なる」という表現は、夭逝した技師におくる言葉にしても過大である。その後の日本における神格化の種を蒔いたといえよう。過労のため死期を早めたと述べ、その次に、夫人の死を美化するような表現がある。

葬儀の参列者が多数だったことを紹介しており、新聞の日付は九月廿四日（11月6日）となっているが、記事執筆は8日以降だったことがわかる。

なお、ここにも「日本人妻説」はない。

3. PICE と JWM の対比

PICE と JWM の間には、来日前経歴に関して若干の相違や矛盾点がある。まず、JWM

17) 10月30日、遺言変更で立会人ブリンクリーとハウウェルの2人に面会している。

Francis Brinkley は1841年12月30日～1912年10月12日。ダブリン北西にあるミーズ生まれ、トリニティ・カレッジ・ダブリンからウリッチ王立軍事学校で学び、67年から駐在武官として日本に滞在。78年から2年半、工部大学校数学教師を務め、81年以降 JWM 社主となり編集に携り、日本政府寄り新聞として強い影響力を持っていた。日本人女性と結婚し、日本で亡くなった。退役後、日本政府から叙勲されている。生年月日や生地は、青山墓地の墓碑銘に拠る。

PICE と JWM 「追悼記事」の来日前経歴の紹介の対比

	PICE	JWM	コメント, 根拠
父母	ピカデリーとノッティングヒルに住んでいた故トーマス・モレルの一人息子。 1841年11月17日生まれ。	フランス人と英国人の間に生まれた。	1840年11月17日生まれ。 祖父ルイはフランス人, 父トーマス・アネット・ルイス・モレル, 母エミリー・エリザベス (旧姓アベケット)。 祖父や父は, ピカデリーでイタリア商品卸商, ワイン商 【出生証明書など】
学歴	KCL ドイツやパリの工業学校 ウリッチ (近視で資格を得ず)	チェルテナム学校ドイツやフランス ウリッチ (王立軍事技師養成学校)	ドイツで勉強した後, 57年の1学期はKCS。58年レント学期からKCL工学部。成績は芳しくなかった。 59年までは名簿に記載されている。 【学費納入書, 成績書】 ノッティングヒルは入学時の住所
師匠	58年5月からエドウィン・クラークに3年半師事した。	エドウィン・クラークに3年半師事した。	クラークは, 50年12月土木学会「準会員」, 55年4月「会員」。 【土木学会入会申請書, 名簿など】
豪州, NZ	62年から, NZ 政府の道路技師の首席補佐 63年, ウェリントン地区主任技師 64~65年, 豪州で自営	2年間, NZ で道路技師の首席補佐	メルボルンで土木技師8ヶ月間自営, オタゴ (NZ) 地方政府の技師補佐5ヶ月, ウェリントン地方政府の主任技師7ヶ月。 【土木学会入会申請書】
ラブアン	1年半, 鉄道を検討 67年鉄道や縦坑建設のためラブアン石炭会社の主任技師兼マネージャー	5年間, ラブアンで主任技師	65年12月着任, 直ちに測量と積算。会社が労働者の手配, 資金提供せず, 在任中鉄道は建設されなかった。 92年 A.J. ウェストが軽便鉄道を完成。 【英国植民地省文書など】
南豪州～セイロン～横濱	69年健康を害し南豪州に移動し, 豪州のインダの元利保証制度導入協会の顧問技師になった。 日本で鉄道建設の技師長に就任するため, それを辞し来日した。	南豪州の鉄道に関する報告を行う予定だったが, 英国への帰途それを辞め日本赴任を受入れた。	69年6月から南豪州の新聞に名前が登場。ポート・オーガスタ鉄道の測量に携わり, 建設のための資金呼び込みに努力。 70年1月, 南豪州の新聞紙上での論争。 2月21日, セイロンのゴールで H.N. レイと会談し, 技師長就任を要請され, 日本へ赴いた。【両者の往復書翰】 4月9日横濱着 【JWM】
夫人	紹介なし。	ハリエット夫人が, 1871年11月6日に死亡したと紹介。	62年2月4日セント・パンクラス教会でハリエット・ワインダー (19歳) と結婚。70年6月7日夫人来日。71年11月6日夫人死亡。【結婚証明書, 結婚承諾書, 死亡証明書など】 結婚直後の豪州, NZ へは同行, ラブアンは単身赴任。

〔註〕 PICE, JWM, および筆者の調査により作成した。【 】内は典拠を示す。

は「フランス人と英国人の間に生まれた」旨述べているが、PICEにはその記述がない。実際には、父方祖父がフランス人で、母方祖先は11世紀のノルマン征服時に遡る。

JWMでは「チェルテナム学校で学んだ」旨があるが、その確証はない。また、クラークに師事していた時期が記されておらず、豪州やNZでの経歴もやや曖昧である。さらにラブアンでの経歴も不正確である。

かくして、JWM記事にはいくつか難点があるといえる。

いくつかの項目について比較し寸評を加えた表を作成したので、参考にしてもらいたい。なお『ヒオゴ』はJWMと類似しており、『横濱毎日新聞』を含め表には入れなかった。

4. 「追悼記事」執筆者は誰か？

以上を踏まえ、これらの「追悼記事」をそれぞれ誰が書いたのか、ということ推理しよう。

『ヒオゴ』は、内容が類似していることから、JWMからの取材・引用と考えられる。『横濱毎日新聞』は、工事進捗状況も載せているので、取材源は鐵道寮だと思われる。臨終の間に夫人に伝えたことが事実であれば、その場に立ち会っていた者となる。

4-1. JWM

この「追悼記事」では、モレルの人柄やレイとの関係などやや詳しく紹介されており、執筆者は個人的に親しかった人物の可能性が高い。葬儀に参列した次の3名のうちのいずれかであろう。

JWM編集者で、遺言書立会人のハウエル。

遺言執行人で、ラブアン時代からの知り合いであるピットマン。

KCLの後輩で、建築副役のヘア。

ヘアは、夫妻の死亡を井上勝にも伝えているので、亡くなった際に傍にいたことになる。彼はモレルと同じくKCL工学部で教育を受けているが、この「追悼記事」にはKCLのことが全く書かれていない。また技師特有の視点からの経歴紹介も少ない。したがって、ヘアの可能性は小さい。

ピットマンは、海軍軍人としてラブアンに行き、そこで退役してビジネスの世界へ転じた。モレル来日前に日本へ来ており、鉄道関係資材調達で日本政府とも取引を行っていた。また『在日外国人名鑑』1870～76年版にも、横濱在住者として載っている。しかしモレルがラブアンに到着したのは65年12月なので、ほぼ5年間そこに居たと彼が紹介することは

考え難く、ピットマンの可能性も低い。

この「追悼記事」は、ほぼ2頁を費やし、冒頭には吟遊詩人テニソンの『イン・メモリアム』からの引用を捧げている。ところで、ディケンズが70年6月8日亡くなり、JWM 7月9日号に死亡記事が掲載されている。母方伯父ギルバート・アボット・アベケット¹⁸⁾がこの小説家と交友があったことを、モレルが編集者ハウエルに話していたかもしれない。

かくして確証はないが、JWM「追悼記事」はハウエルが書いたと考えられる。

4-2. PICE

他の技師と同様にPICE「追悼記事」には署名がなく、土木学会に問合せでも執筆者を確定できない。

そこで初めにJWMとPICEの内容を確認しておこう。JWMにあった「両親はフランス人と英国人」、「チェルテナム学校で勉強した」との表現が消え、ラブアンでの在任期間が修正されている。対してPICEでは、父親の名前と居住地が記され、KCLで学んだことが紹介されているが、これらのことは土木学会「入会申請書」にも記されていない。また経歴や病状についてJWMと同じ文言があり、加えて土木学会「入会申請書」を参考にしている部分がある。

学業に関してはモレルの親族あるいはモレルの師クラークから取材したと考えられる。しかしピカデリーでワイン商をしていた父親の職業については何ら触れていないので、前者の可能性は小さい。

モレルが1863年初めにメルボルンやNZに行ったのは、「クラーク特許」のドック建設を推奨するためであった。また69年の南豪州の鉄道建設計画も、クラークの紹介だった。すなわち、クラークがこの部分を間違ふことはありえない。さらに「1841年誕生説」だと、65年5月に「準会員」として入会したことが1年半の年数不足となり、クラークの提案（+6名の技師の推薦）が問題視される危惧がある。したがって、モレルの師クラークが執筆した可能性は極めて小さい。

以上を踏まえ、次の理由により、同じ土木学会準会員だった「燈臺寮技師ブラントンが帰国中に執筆した」と考えられる。

18) Gilbert Abbott àBeckett, 1811年生まれで、ウェストミンスター・スクールの後、28年4月25日に法曹学院グレイズ・インに入学し、41年1月27日にバリスターに任じられ、優秀で高潔な人という評判を得た。法律家としてよりも、文筆家、雑誌編集者として有名で、41年に発刊された『パンチ』に、創刊時から最も頻繁に寄稿している。演劇にも関心を寄せ、評論するだけでなく芝居の台本も書いている。56年8月30日、フランスのプローニュでチフスに罹り死亡した。友人ディケンズらの手紙や追悼文で、彼の才能や貢献を知ることができる。

ブラントン（Richard Henry Brunton, 1841～1901年）は72年4月から約1年間下賜休暇で帰国し、72年6月18日～73年2月12日英国に滞在していた¹⁹⁾。「追悼記事」執筆に必要と考えられる土木学会加入者、日本在住者、執筆当時英国に滞在し「入会申請書」閲覧可能でクラークからも取材可能という条件をすべて満たしている。さらに、モレルとは1歳違いで（ブラントンは41年12月26日スコットランドのアバディーン生まれ）、70年頃日本で生まれた娘にモレル夫人と同名のハリエットと名付け（1891年、1901年国勢調査で確認）、モレル夫妻との親密な関係を連想させる。また執筆のためJWM「追悼記事」を英国に持ち帰っていたかもしれない。

PICE「追悼記事」の明治天皇（His Majesty the Temio）の表記は、執筆者による校正作業が充分できなかったことを示している。

さらに、レイとの雇用契約締結を軽く述べただけで、モレルが日本到着直後に日本政府と契約したことは一切触れていない。レイが代理人に指名したトロートマンとモレルが上海で締結した雇用契約、日本政府によるトロートマンの忌避、さらにレイによる代理人解雇、レイ契約の破棄から示談という、モレルの地位に直接関わりのあることも書いてない。このように日本政府にとって不都合なことは避け、その立場を十分に配慮した節が窺える。

ところで、1872年後半期には岩倉使節團が英国を訪れ、10月には鐵道開業式が挙行された。このとき、モレルと親交があり導入に功績のあった「41年生まれ」の伊藤博文も、副使として同行していた。ブラントンはモレルの経歴に関して、伊藤と確認しあったかもしれない。因みにブラントンは著書で²⁰⁾、工部大輔の伊藤と岩倉使節團の随員達を、その間たくさんの英国の工場に案内する役を担当したと記している。

かくして筆者は「ブラントン執筆説」を提唱したい。

5. 結論

明治四年九月廿四日（1871年11月6日）『横濱毎日新聞』は、多くの人に惜しまれつつ齢30にして亡くなった技師長を紹介するにしろ「英國無双の工部之道尔通明なる者にして、最も萬國中に英名を轟かせし者」と過度に美化している。11月8日 *The Hiogo News* は、両親の事とラブアンでの在任期間以外に11月11日 *The Japan Weekly Mail* と特に大きな相違点はなく、日付は逆だが後者からの情報提供と考えられる。その *The Japan Weekly*

19) 横浜開港資料館編『R.H.Brunton 日本の灯台と横浜のまちづくりの父』101頁年表参照。経歴もこれに詳しい。

20) Brunton, *Building Japan 1868-1876*. p.118.

*Mail*の経歴紹介は、大まかには正しいが厳密さには欠けている。以上は日本国内で発行されていた新聞であるが、そこに「日本人妻説」はない。

没後1年余経ってからの *The Minutes of the Proceedings of the Institution of Civil Engineers* 第36巻「追悼記事」は、若干の不正確さはあるものの内容面でそれほど問題はない。ただし「1841年誕生」は間違いである。なお日本でしばしば紹介されてきた①ピカデリー・ノッティングヒル誕生説、②KCL卒業説、③豪州ラブアン説、④NZ説、⑤セイロン説、⑥土木学会会員説などはすべて誤っており、かつこれらはこの「追悼記事」に依拠したものでもない。

*The Japan Weekly Mail*で経歴を紹介したのは、同紙編集者のハウエルと思われる。彼は、モレルの遺言書の立会人でもあった。

The Minutes of the Proceedings of the Institution of Civil Engineers「追悼記事」執筆者は、当時下賜休暇帰国中の燈臺寮技師ブラントンと考えられる。彼は来日直前の68年4月に、準会員として土木学会に加入していた。また日本帰任後の73年5月会員となっている。

参考文献

大内兵衛・土屋喬雄編『明治前期財政経済史料集成』第10巻、1963年。

立脇和夫監修『*The Japan Directory* 幕末明治在日外国人・機関名鑑』全48巻、ゆまに書房、1996～1997年。

田中時彦『明治維新の政局と鉄道建設』吉川弘文館、1963年。

日本史籍協会編『陰陽暦対照表』東京大学出版会、覆刻版1978年。

林田治男「モレルの経歴に関する諸説」『大阪産業大学経済論集』第11巻1号、19～70頁、2009年。

同『日本の鉄道草創期—明治初期における自主権確立の過程』ミネルヴァ書房、2009年。

同『エドモンド・モレル』ミネルヴァ書房「日本評伝選」、2018年。

山田直匡『お雇い外国人④ 交通』鹿島出版会、1968年。

横浜開港資料館編『R.H.Brunton 日本の灯台と横浜のまちづくりの父』、1991年。

Brunton, Richard Henry, *Building Japan 1868-1876*, with an introduction & notes by Sir Hugh Cortazzi ; in addition to the 1906 introductory, postscript & notes by William Elliot Griffis.

Sakasegawa, Sumiyuki, "Two Victorian Englishmen Who Introduced Western Vegetables", 『志學館大学人間関係学部研究紀要』第30巻1号、27～51頁、2009年。

『横濱毎日新聞』、明治四年九月廿四日〔1871年11月6日〕。

The Japan Weekly Mail [JWM], 11th November, 1871.

The Hiogo News, 8th November, 1871.

The Minutes of the Proceedings of the Institution of Civil Engineers, vol. 36, 1873, Memoirs, pp.299-300.

The Obituaries Dedicated to Edmund Morel

HAYASHIDA Haruo

- Key Words :** 1. Edmund Morel
2. *The Proceedings of the Institution of Civil Engineers*
3. *The Japan Weekly Mail*

Abstract

Edmund Morel, the first engineer-in-chief of the Imperial Railways of Japan, arrived at Yokohama on 9th April, 1870, and died on 5th November, 1871. His devotion to constructing Japan's railway is to be noted. When he met the Japanese officials on 19th April, he proposed several conditions for its development, such as the establishing of the Department of Public Works and the founding of the Imperial College of Engineering. The former proved to be a systematic and effective method for the Meiji Government for building necessary infra-structures, and the latter contributed to nurturing talented engineers. Because the Government adopted his proposals, Japan's socio-economic development was rapid and substantial. Therefore, he was much appreciated by Japanese people.

In order to clarify his accomplishments in Japan, it is necessary to trace his career in detail. The outline of his life history can be informed by the obituaries found in *The Japan Weekly Mail* (JWM) and *The Proceedings of the Institution of Civil Engineers* (PICE).

I summarize these articles and compare the differences found between them. PICE obituary presents the details of his career accurately, except his birth-year. In contrast, JWM does not inform with accuracy his practical engineering before he arrived in Japan, though it does not refer to his wife, Harriet. I have attempted to identify the writers of these two obituaries, and also introduce the articles from other sources, such as *The Yokohama Mainichi Shimbun* and try to shed light on the causes and the origin of these mistaken views held by Japanese concerning to his careers.